



## ハーティクラブが表彰されました

去る11月26日(土)、『ふくの少年ハーティクラブ』の今年度3回目の活動がありました。今回は、介護老人施設『さつき荘』にて、業務のお手伝いをしてきました。まずは、座布団カバーの交換、次に、市指定のゴミ袋の名前書き、最後に募金の集計をしました。コロナ禍のため、お年寄りとの直接交流はできませんでしたが、十分喜んでいただけたものと思います。



そんなハーティクラブが、令和4年度富山県更生保護事業関係者顕彰式にて『中部地方更生保護委員会委員長感謝状』を受賞しました。本クラブは、平成11年に青少年の健全育成と非行防止を図り、心豊かな地域社会を実現するために、青少年育成福野町民会議(現青少年育成南砺市民会議福野支部)が中心となり結成されたものだそうです。それ以来24年間、社会を明るくする運動に意欲的に取り組んできたことが認められ感謝状をいただくことになりました。24年間続いてきたということは、保護者の皆様の中にも、ハーティクラブの活動をしてきたという方がいらっしゃるのではないのでしょうか。たいへん名誉なことです。12月2日(金)には、クラブ員を代表して6年生5名が南砺市教育委員会を訪れ、教育長に受賞の報告をしてきました。教育長からは、「ボランティアの活動は、なかなかできるものではありません。ハーティクラブに入ってくれてありがとう。これからも社会が明るくなるように活動を続けてください」と、ねぎらいと感謝の言葉をいただきました。

ハーティクラブの4回目の活動は、12月27日(火)「歳の大市(上町銀行四つ角周辺)」での防犯・交通安全のチラシ配布と歳末の防犯や安全の呼びかけです。子供たちは寒い中を頑張りますので、チラシが差し出されたら、こころよく受け取ってください。また、ハーティクラブは6年生が抜けるとクラブ員がわずかになってしまいます。活動は年に5回ほどです。ボランティアの輪が途切れないように、来年度、新入会員が増えることを期待します。

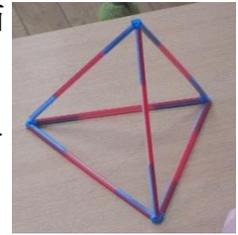
## 中学校の先生の乗り入れ授業

6年生が中学校進学に向けて円滑に適應できるように、小中連携の取組をしています。その一環として、南砺市では、どこの小学校でも、進学先の中学校の先生に授業をしてもらっています。

12月9日(金)には、福野中学校の数学の先生である酒井教頭先生に来てもらい、6年生3クラスが1時間ずつ算数の授業を受けました。授業では、中学校で学習する2つの立体(正四面体、錐体)を先取りして教えていただきました。授業は、①正四面体の存在を知る、②円錐の展開図を考える、③底面積と高さが等しい錐体と柱体では体積が何倍になっているかを考える、の3部構成になっていました。

### ① 正四面体の存在を知る

授業は、正四面体がどんな立体であるかを予想するところから始まりました。子供が予想します「同じ面が4つある形」だと。「すごい！そうですね。でも、どんな立体か想像できますか？」という問いに、子供たちは、また一生懸命考えます。その後、6本のストローと8本のモールが入った袋を全員に配られ、「正四面体を作ってみよう」と投げかけられました。出来上がった正四面体に子供たちは納得していました。そして、正しい算数用語を使うと、「同じ面≒合同な正三角形」「形≒立体」ということで、正四面体を「4つの合同な正三角形を面とする立体」とまとめられました。



### ② 円錐の展開図を考える

以前は、6年生で学習していた錐体も、今は中学1年生で学習します。でも、錐体という用語を知っている子供も大勢いたようです。そこにまた、「すごいね。よく知っているね」の酒井教頭先生の言葉を聞きました。酒井教頭先生はよく「すごいね」という言葉を子供たちにかけてくれます。そして、円錐の模型を提示され、錐体の「錐」は穴を開ける「先のとがったキリ」だということから、「錐体は、先のとがった立体である」と説明されました。さらに、「クイズです。円錐の展開図は、次の3つのどれになるでしょう」と投げかけられました(写真の通り)。正解の②という子供が多かったのですが、自信はなさそうでした。円錐の形をしたアイスクリーム(ジャイアントコーン?)を提示し、実際に子供に切らせて確認されました。



### ③ 底面積と高さが等しい錐体と柱体では体積が何倍になっているかを考える

体積の比較のために、透明な錐体と柱体の容器と赤い色水を提示し、錐体に擦り切れいっばいに入った水を柱体に移すと何倍入るか予想を問われました。2杯と言う子供が多かったでしょうか。円錐と円柱だけでなく、四角錐と四角柱も、五角錐と五角柱も、ちょうど3杯になったことに、子供たちは驚いていました。



楽しくて、よく分かる授業でした。予想し、体験を通して学んだことでよく理解できました。中学校になると、教科担任制になる、50分授業になる、部活動が始まる・・・等、小学校とは違う環境になります。それに戸惑う子供も少なからずいるでしょう。そんなときに、顔を知っている先生がいてくれるというのは、子供たちにとって心強いことです。乗り入れ授業に限らず、これからも小中連携を進め、子供たちが円滑に中学校へ進学できるように努めていきます。

また、専門の先生が教えると、子供たちに力が付きます。今日の授業でいうと、酒井教頭先生は、正しい算数の用語を使うことを大切にして授業を進めておられました。中学校の数学には、子供たちが苦手とする「証明」が入ってきます。それには、平日頃から、正しい算数の用語を使って、自分の考えを説明することが大切なのです。低学年のうちには、子供をよく知る学級担任が授業をする「学級担任制」がよいと思いますが、高学年になれば「教科担任制」も有効であると考えます。今、文部科学省では高学年の教科担任制の本格導入を検討しています。しかし、それには課題も多く、ただでさえ、なり手が少ない教員をどう増やすのか、人員を増やすとそれだけの人件費をどこから出すのかということ、簡単にはできないと考えます。今年度、本校では、外国語と理科の専科教員が配置され、効果を上げています。専科教員が増えるように、学校からも要望していきたいと考えます。

(校長 曲 師 政 隆)